

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）
分担研究報告書

1. 健診センター・人間ドック施設における HIV・梅毒検査提供方法に関する研究

研究代表者 川畑拓也 地方独立行政法人 大阪健康安全基盤研究所 主幹研究員
研究分担者 渡邊 大 国立病院機構 大阪医療センター HIV 感染制御研究室長
研究分担者 駒野 淳 大阪薬科大学 感染制御学研究室 教授
研究協力者 崎原永辰 那覇市医師会生活習慣病検診センター センター長
研究協力者 真栄田哲 那覇市医師会生活習慣病検診センター 検診部次長
研究協力者 伊禮之直 那覇市医師会生活習慣病検診センター 検診部
研究協力者 仲宗根正 那覇市保健所 参事
研究協力者 久高 潤 沖縄県保健医療部地域保健課結核感染症班 班長
研究協力者 仁平 稔 沖縄県保健医療部衛生環境研究所 衛生生物班

研究要旨

那覇市医師会生活習慣病検診センター（以下、那覇市医師会検診センター）において、HIV 治療の最新情報と検査を受けたことや結果が秘匿される内容を明記した HIV・梅毒検査案内を、健診受診予定者へ事前に発送する問診票の封筒に同封し、8月1日より発送し、無料 HIV・梅毒検査の提供を開始した。

検査案内は毎月 1500～2000 部発送し、11 月の末までに合計 7036 部を発送した。各月の受検者数は、8月が 77 名、9月は 205 名、10月は 285 名、11月は 283 名、12月は 253 名であり、8月から 12 月の末までに合計 1103 名が受検した。

健診受診者数に対する受検者の割合は、検査提供当初の 8月は平均 4.97%であったが、9月は 10.01%、10月は 12.49%、11月は 12.13%、12月は 11.67%となり、12.10%（10～12 月まで 3 ヶ月間の平均）まで上昇した。この割合は、検査提供当初と比較して 2.43 倍であり、また 2 年前の調査で判明した、全国の健診施設における HIV 検査の利用率（0.16%）と比較して 75.6 倍と、高い利用率であった。

12 月末までの受検者 1103 名中、HIV スクリーニング検査陽性者数は 1 名、梅毒抗体陽性者数は 9 名であった（重複無し）。このうち、HIV スクリーニング検査で陽性であった 1 名に関しては、那覇市保健所における確認検査の結果、新規 HIV 陽性者であることを確認し、後日無事拠点病院を受診し、治療に繋がったことを確認した。一方、梅毒検査で陽性となった 9 名は、那覇市医師会検診センターにおいて地域の診療所を紹介され、診断・治療のために診療所を受診した。

HIV・梅毒検査受検者に対し、受検理由等を問うアンケート調査を 12 月の 1 ヶ月間に実施した。受検者 241 名に協力を依頼し、190 名（男性 90 名、女性 100 名）の同意を得て回答を回収した。調査の結果、男性の 77%、女性の 75%が HIV 検査を初めて受けていた。また、男性受検者に占める MSM の割合は 7.8%で、MSM のうち 43%が HIV 検査を初めて受けていた。検査を受けた理由では、「検診のついでなので、検査が受けやすかったから。」と回答した割合が男女ともに最も高く（男性 73%、女性 89%）、次点が男女とも「無料だから。」であった（男性 54%、女性 44%）。有料でも HIV・梅毒検査を受けようと思うか尋ねたところ、「有料であれば利用しない。」と回答した人の割合が最も高く（男性 59%、女性 45%）、健診施設で HIV 検査を提供する場合、有料であれば利用されにくいことが示唆された。

那覇市医師会検診センターにおいて提供していた無料 HIV・梅毒検査は、研究予算の都合上 12 月末で打ち切らざるを得なかった。

A. 研究目的

HIV 感染症は早期発見・治療により感染の拡大と発症を防止することが必要であるが、我が

国では症状が出て初めて感染が判明する HIV 症例が 2016 年の総報告数の約 30%（1448 例中 437 例）を占め、そのうち就労世代の 30～59

歳は約 76%を占める。大阪府内における我々の調査でも同様の結果が得られている（川畑、南界堂通信 2013 年春号、MASH 大阪編）。HIV 検査は保健所での無料匿名検査を軸とするが、時間的・空間的制約から、就労世代にとっては利用しにくい。その結果、住民において、発症する前に HIV 感染を検知する機会が失われている恐れがある。

本研究では、労働安全衛生法第 66 条に基づき事業者が労働者に対して実施する定期健康診断（規則第 44 条）において事業者の結果を知られることなく HIV 検査を受けられる環境・機会を健診センターあるいは人間ドック施設（以下、健診施設）に整備・提供する方法の検討を行い、エビデンスを積み上げることで、国が平成 30 年 7 月 13 日に発出した通知、健発 0713 第 2 号「職域健診 HIV・性感染症検査モデル事業について」により「エイズ対策における重点都道府県等」に促した職域健診における HIV・性感染症検査モデル事業の実施を促進させ、新たな検査機会として普及させていくことを目的とする。

B. 研究方法

健診受診者の HIV・エイズの知識を測るアンケート調査の実施後、8 月より那覇市内の健診施設において HIV・梅毒検査案内を健診受診予定者に問診票と共に発送し、無料 HIV・梅毒検査の提供を開始した。検査案内には「HIV 感染症・エイズはもはや『死に至る病』では無い」「一日一回一錠の服薬で治療可能」「検出限界以下ならパートナーに HIV が感染しない」といった HIV 感染症・エイズの印象を改善する HIV 治療の最新情報と、「検査結果はあなただけにお伝えします」「健康診断の依頼元であるあなたの会社の人などには、検査結果も、検査を受けたことも決して伝えません」といった、受検したことや結果が秘匿される内容を明記した。加えて梅毒が国内で流行していることも記載した。

さらに、HIV・梅毒検査受検者に対し、受検理由等を問うアンケート調査を実施した。アンケートは匿名・自記式で、健診当日に協力を依頼し、同意が得られた人より回答を回収した。（倫理面への配慮）
本研究は地方独立行政法人 大阪健康安全基盤研究所 倫理審査委員会の承認を得て実施した（申請番号：1802-07-3、0810-04-5）。

C. 研究結果

那覇市医師会検診センターにおいて、健診受

診予定者へ事前に発送する問診票の封筒に、HIV 治療の最新情報と検査を受けたことや結果が秘匿される内容を明記した HIV・梅毒検査案内を同封し、令和元年 8 月 1 日より発送を開始した。案内は毎月 1500～2000 部発送し、11 月の末まで合計 7036 部を発送した。各月の受検者数は、8 月が 77 名、9 月は 205 名、10 月は 285 名、11 月は 283 名、12 月は 253 名であり、12 月末までで合計 1103 名が受検した。

健診受診者数に対する HIV 検査受検者の割合は、検査提供当初の 8 月は平均 4.97%であり、一昨年度に当研究班で実施した全国の健診施設向けアンケート調査で判明した、健診施設で実施されているオプション検査における HIV 検査の利用率 0.16%と比較して十分に高い割合であった。その後、9 月は 10.01%、10 月は 12.49%、11 月は 12.13%、12 月は 11.67%と平均 12.10%(10～12 月まで 3 ヶ月間の平均)まで上昇し、検査提供開始時と比較して 2.43 倍に、全国の健診施設のオプション HIV 検査の利用率と比較して 75.6 倍となった。

12 月末までの受検者 1103 名中、HIV スクリーニング検査陽性者数は 1 名、梅毒抗体陽性者数は 9 名であった（重複無し）。この内、HIV スクリーニング検査で陽性であった 1 名に関しては、事前の計画通り那覇市医師会検診センターにて告知を行い、確認検査を受けるよう那覇市保健所を紹介した。この受検者は那覇市保健所を訪れ、確認検査を受検した。その確認検査の結果、当該受検者が真の HIV 陽性者であることが確認された。この新規 HIV 陽性者は那覇市保健所において HIV 感染の告知を受けた後、地域のエイズ診療拠点病院を紹介された。後に拠点病院からの受診確認の知らせにより、この拠点病院を受診し、治療に繋がったことを確認した。

梅毒検査で陽性となった 9 名は、那覇市医師会検診センターにおいて地域の診療所を紹介され、診断・治療のために診療所を受診した。

HIV・梅毒検査受検者に対し、受検理由等を問うアンケート調査を実施した。調査では、「年齢」「性別」「性行為の相手の性別」「心配な感染症」「検査を受けようと思った理由」「HIV 検査の経験」「過去に HIV 検査を受けた場所」「検診時の HIV 検査を受けた理由」「有料でも利用するか」「利用者の増加に繋がる施策」について尋ねた。アンケート調査は HIV・梅毒検査の実施が軌道に乗った 12 月初めから開始し、12 月末までの 1 ヶ月間実施した。この間に HIV・梅毒検査受検者 241 名に協力を依頼し、190 名（男性 90 名、女性 100 名）の同

意を得て回答を回収した。

調査の結果、男性の 77%、女性の 75%が HIV 検査初受検者であった。また、男性受検者に占める MSM の割合は 7.8%で、MSM のうち 43%が HIV 検査初受検者であった。検査を受けた理由は、男女とも「検診のついでなので、検査が受けやすかったから。」と回答した割合が最も高く(男性 73%、女性 89%)、次点が男女とも「無料だから。」であった(男性 54%、女性 44%)。受検した理由で 3 番目に多かったのは、「今まで検査を受ける機会がなかったから。」(男性 23%、女性 38%)であった。また、有料でも利用しようと思うか尋ねたところ、「有料であれば利用しない。」と回答した人の割合が最も高かった(男性 59%、女性 45%)。

那覇市医師会検診センターにおいて健診受診者に提供していた無料 HIV・梅毒検査は、研究予算の都合上 12 月末で打ち切らざるを得なかった。

D. 考察

8 月より那覇市医師会生活習慣病検診センターの協力のもと、健診受診者に対し無料 HIV・梅毒検査の提供を開始したところ、予想に反して高い割合(約 12%)の受診者が利用した。このため、一年を通じて検査を提供するには、研究費だけでは難しく、国のモデル事業への自治体の参画が必要である事が明らかとなった。また、今年度の受検者 1103 名中に 1 名の HIV 陽性者が新たに診断された。陽性率が低い人口集団が受診する健診施設であっても、長く検査を提供し続けていれば、いずれは陽性者が診断され、費用対効果の推計が可能と考えていたが、予想外に早く新規 HIV 陽性者が診断された。事前の十分な準備のおかげで、混乱すること無く本人に告知し、確認検査とその後の治療に繋げることができ、また、治療に繋がったことを確認することが出来たことは、非常に価値があると思われる。医療機関である健診施設において HIV 検査を提供することの意義は、上記のように HIV 陽性者を確実に治療へ繋げることが可能な点であると我々は考える。

受検者アンケートの結果、検査を有料で提供した場合、利用者が半数程度に減少することが示唆された。しかしながら、一方では、生涯初受検の割合が男女とも 75%以上であったり、男性受検者のうち 7.8%が MSM であり、そのうち 43%が HIV 検査生涯初受検であるなど、これまで検査を受けてこなかった層に HIV 検査を提供できる可能性が示唆された。健診施設で HIV 検査を提供する場合、有料であれば利用

されにくいことも示唆された。

E. 結論

これまで HIV 検査・梅毒検査を健診利用者に提供していなかった健診施設において、無料 HIV・梅毒検査の提供を開始したところ、予想に反して多くの健診受診者の利用があり、受検者の 7 割以上が生涯初受検者であった。検査の提供はわずかな期間で限られた人数に対してであったにも関わらず、その間に真の HIV 陽性者を診断し、確実に治療に繋げることが出来たことは意義が大きい。今後、他の健診施設への波及効果が期待される。

G. 研究発表

1. 論文発表

1. 川畑拓也、阪野文哉、小島洋子、森 治代、本村和嗣、駒野 淳、篠原 浩、古林敬一、臨床的に梅毒と診断した日本人患者から分子疫学解析によって本邦で初めて検出された bejel の病原体 *Treponema pallidum* ssp. *Endemicum*、病原微生物検出情報(IASR)、41(1)、4-5、2020.1.28
2. Satoshi Hiroi、Takuya Kawahata、Keiichi Furubayashi. First isolation of human adenovirus type 85 by molecular analysis of adenoviruses in cases of urethritis. J Med Microbiol. 2020 Jan 23. doi: 10.1099/jmm.0.001149. [Epub ahead of print]
3. 貞升健志、長島真美、吉村和久、川畑拓也、佐野貴子、近藤真規子、松岡佐織、草川 茂、立川 愛、病原体検出マニュアル「後天性免疫不全症候群」改訂の経緯、病原微生物検出情報(IASR)、40(10)、166-167、2019
4. Saori Matsuoka、Kazuhiko Kano、Mami Nagashima、Kenji Sadamasu、Haruyo Mori、Takuya Kawahata、Shuichi Zaitu、Asako Nakamura、Mark S. de Souza and Tetsuro Matano. Estimating HIV-1 incidence in Japan from the proportion of recent infections. Preventive Medicine Reports. 2019 Oct 21;16:100994. doi: <https://doi.org/10.1016/j.pmedr.2019.100994>
5. Takuya Kawahata、Yoko Kojima、Keiichi Furubayashi、Koh Shinohara、Tsunehiro Shimizu、Jun Komano、Haruyo Mori、Kazushi Motomura. Bejel, a Nonvenereal Treponematosis, among Men who have Sex with Men, Japan. Emerging Infectious Diseases 2019

- Aug;25(8):1581-1583. doi: 10.3201/eid2508.181690.
6. Lee, Ken-ichi; Nakayama, Shu-ichi; Osawa, Kayo; Yoshida, Hiroyuki; Arakawa, Soichi; Furubayashi, Kei-ichi; Kameoka, Hiroshi; Shimuta, Ken; Kawahata, Takuya; Unemo, Magnus; Ohnishi, Makoto. Clonal expansion and spread of the ceftriaxone-resistant *Neisseria gonorrhoeae* strain FC428 identified in Japan in 2015 and closely related isolates. *Journal of Antimicrobial Chemotherapy* 2019 Jul 1;74(7):1812-1819. doi: 10.1093/jac/dkz129.
 7. Terada S, Harada T, Yokota M, Tsuchiya T, Adachi K, Asaka T, Miura M, Kawahara R, Kawatsu K, Komano J. First isolation and characterization of vancomycin-resistant *Enterococcus faecium* harboring vanD5 gene cluster recovered from a 79-year-old female inpatient in Japan. *Diagn Microbiol Infect Dis.* 2019 Dec;95(4):114883. doi: 10.1016/j.diagmicrobio.2019.114883. Epub 2019 Aug 10.
 8. Kurata T, Uchino K, Hotta C, Ogura A, Miyoshi T, Ogawa T, Kanbayashi D, Tanaka T, Yumisashi T, Komano J. Clinical value of enzyme immunoassay that detects rubella-specific immunoglobulin M immediately after disease onset. *Microbiol Immunol.* 2019 Jan;63(1):32-35. doi: 10.1111/1348-0421.12664.
 9. 下坂馨歩, 浅香敏之, 今村淳治, 横幕能行, 片山雅夫, 川崎朋範, 下坂寿希, 亀井克彦, 矢田啓二, 駒野 淳. ベトナム人 HIV 陽性者から分離された *Talaromyces marneffeii* によるマルネツフェイ型ペニシリウム症の 1 例. *Med Mycol J.* 60(1), 15-20, 2019
 10. Dai Watanabe, Tomoko Uehira, Sachiko Suzuki S, Erina Matsumoto, Takashi Ueji, Kazuyuki Hirota, Rumi Minami, Soichiro Takahama, Kimikazu Hayashi, Morio Sawamura, Masahiro Yamamoto, Takuma Shirasaka. Clinical characteristics of HIV-1-infected patients with high levels of plasma interferon- γ : a multicenter observational study. *BMC Infect Dis.* 2019. 19(1):11.
 11. Satoshi Tanaka, Tomomi Kishi, Akio Ishihara, Dai Watanabe, Tomoko Uehira, Hisashi Ishida, Takuma Shirasaka, Eiji Mita. Outbreak of hepatitis A linked to European outbreaks among men who have sex with men in Osaka, Japan, from March to July 2018. *Hepatology Res.* 2019. 49(6):705-710.
2. 学会発表
1. 川畑拓也, 阪野文哉, 小島洋子, 森 治代, 本村和嗣, 上原大知, 伊禮之直, 真栄田哲, 崎原永辰, 仲宗根正, 仁平 稔, 久高 潤, 渡邊 大, 大森亮介, 駒野 淳, 健診機会を利用した HIV・梅毒検査提供に向けた検討, 第 33 回日本エイズ学会学術集会, 熊本, 2019
 2. 川畑拓也, 新しい HIV 確認検査試薬「Geenius HIV-1/2」の特徴について, 第 33 回日本エイズ学会学術集会, 熊本, 2019
 3. 川畑拓也, 砂山智子, 山田香保理, 森川哲也, 阪野文哉, 森 治代, ダイナスクリン・HIV Combo 抗原偽陽性事例の検討, 第 33 回日本エイズ学会学術集会, 熊本, 2019
 4. 森 治代, 小島洋子, 阪野文哉, 川畑拓也, 森田 諒, 小西啓司, 麻岡大裕, 白野倫徳, 古西 満, 抗レトロウイルス療法下における HIV-1 プロウイルスの動態, 第 33 回日本エイズ学会学術集会, 熊本, 2019
 5. 土屋菜歩, 佐野貴子, 近藤真規子, カエベタ亜矢, 関なおみ, 城所敏英, 根岸 潤, 堅多敦子, 川畑拓也, 貞升健志, 須藤弘二, 加藤真吾, 大木幸子, 生島 嗣, 今井光信, 今村顕史, 保健所・検査所における HIV 検査・相談体制と実施状況および課題に関するアンケート調査, 第 33 回日本エイズ学会学術集会, 熊本, 2019
 6. 土屋菜歩, 佐野貴子, 近藤真規子, カエベタ亜矢, 関なおみ, 城所敏英, 根岸 潤, 堅多敦子, 川畑拓也, 貞升健志, 須藤弘二, 加藤真吾, 大木幸子, 生島 嗣, 今井光信, 今村顕史, 保健所・検査所における梅毒検査実施状況および陽性率に関するアンケート調査, 第 33 回日本エイズ学会学術集会, 熊本, 2019
 7. 出野結己, 山本啓裕, 岡崎伸次, 松本美枝, 藤川利彦, 川畑拓也, 古林 敬一, *Treponema pallidum* 亜種感染例での TP 抗体, 脂質抗体の測定結果について, 第 32 回日本性感染症学会学術大会, 京都,

- 2019
8. 川畑拓也、梅毒核酸検査(梅毒トレポネーマPCR法)の実際、第32回日本性感染症学会学術大会、京都、2019
 9. 川畑拓也、リアルタイムPCR法を用いた梅毒核酸迅速検査、第32回日本性感染症学会学術大会、京都、2019
 10. 古林敬一、小島洋子、川畑拓也、梅毒の届出基準に関する検討、第32回日本性感染症学会学術大会、京都、2019
 11. 川畑拓也、阪野文哉、岩佐 厚、亀岡 博、菅野展史、清田敦彦、近藤雅彦、杉本賢治、高田昌彦、田端運久、中村幸生、古林敬一、塩野徳史、田邊雅章、MSM向けHIV・性感染症検査キャンペーン・2018年度実績報告、第32回日本性感染症学会学術大会、京都、2019
 12. 川畑拓也、阪野文哉、岡 伸俊、今西 治、吉田光宏、福原 恒、朝来駿一、塩野徳史、澤田暁宏、西岡弘晶、荒川創一、阪神地区在住MSM向けHIV・性感染症検査キャンペーン・2019年度速報、第32回日本性感染症学会学術大会、京都、2019
 13. 貞升健志、長島真美、千葉隆司、川畑拓也、地方衛生研究所におけるHIV検査に関する精度管理調査から得られたこと、第78回日本公衆衛生学会総会、高知、2019
 14. 渡邊 大、川畑拓也、森 治代、小島洋子、駒野 淳、塩田達雄、中山英美、村上 努、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨、プロテアーゼ領域と逆転写酵素領域の配列を用いた新型変異HIV感染のスクリーニング法に関する検討、第33回近畿エイズ研究会学術集会、大阪、2019
 15. 森 治代、小島洋子、阪野文哉、川畑拓也、HIV確認検査陽性検体におけるHIVの分子疫学的解析、第33回近畿エイズ研究会学術集会、大阪、2019
 16. 蜂谷敦子、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、岡 慎一、瀧永博之、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、椎野禎一郎、須藤弘二、加藤真吾、堀場昌英、太田康男、茂呂 寛、渡邊珠代、松田昌和、重見 麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、小島洋子、森 治代、菊地正、他15名、国内新規HIV/AIDS診断症例における薬剤耐性HIV-1の動向、第33回日本エイズ学会学術集会、熊本、2019
 17. 土屋孝弘、谷口菜優、中村光希、蓮井良美、丸山奈緒子、宮本勝城、良原栄策、駒野 淳、多剤耐性アシネトバクターに対する新規抗菌物質の開発、第31回微生物シンポジウム、2019年、京都。
 18. 倉田 貴子、上林 大起、駒野 淳、本村 和嗣、成人麻疹患者における補助的診断マーカーの探索、第67回日本ウイルス学会学術集会、東京、2019年。
 19. Naomi Sakon, Rika Takada, Tomoko Takahashi, You Uyeki, Kazushi Motomura, Jun Komano. Analysis of Longitudinal Surveillance Data of Norovirus Infection in Three Remote Locations in Japan. 7th International Calicivirus Conference. 2019. Australia.
 20. 廣田和之、渡邊 大、小泉祐介、坂梨大輔、上地隆史、西田恭治、竹田真未、田栗貴博、小澤健太郎、三鴨廣繁、白阪琢磨、上平朝子、当院のHIV感染者の皮膚軟部組織感染症における市中感染型メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染に関する検討、第33回近畿エイズ研究会学術集会、大阪、2019年
 21. 矢倉裕輝、渡邊 大、中内崇夫、櫛田宏幸、西田恭治、宮部貴識、佐光留美、上平朝子、山内一恭、白阪琢磨、日本人HIV-1感染症患者における投与開始早期のテノホビル血漿トラフ濃度高値とテノホビルジソプロキシルフマル酸塩の長期投与時の腎機能関連有害事象による投与中止の関連、第33回近畿エイズ研究会学術集会、大阪、2019年
 22. 高野浩司、西本溪佑、山崎弘輝、村上皓紀、館 哲郎、木谷知樹、金村米博、中島 伸、榊田智仁、来住知美、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、藤中俊之、HIV陽性患者の中樞神経病変-脳生検術の必要性-、日本脳神経外科学会第78回学術集会、大阪、2019年
 23. 蜂谷敦子、佐々木悟、伊藤俊広、瀧永博之、岡 慎一、渡邊 大、白阪琢磨、南留美、山本政弘、松田昌和、重見 麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、杉浦 互、吉村和久、菊地 正、薬剤耐性HIV調査ネットワーク、国内新規HIV/AIDS診断症例における薬剤耐性HIV-1の動向、第73回国立病院総合医学会、名古屋、2019年
 24. 今橋真弓、岡 慎一、伊藤俊広、山本政

- 弘、渡邊 大、宇佐美雄司、池田和子、本田美和子、吉野宗弘、横幕能行、エイズ診療で国立病院機構が地域で果たすべき役割、第73回国立病院総合医学会、名古屋、2019年
25. 矢倉裕輝、櫛田宏幸、渡邊 大、中内崇夫、西田恭治、宮部貴識、佐光留美、上平朝子、白阪琢磨、山内一恭、ラルテグラビル1日1回1200mg投与における血漿中トラフ濃度に関する検討、第73回国立病院総合医学会、名古屋、2019年
26. 中内崇夫、矢倉裕輝、櫛田宏幸、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨、当院におけるリルピビルン/エムトリシタピン/テノホビルアラフェナミドフマル酸塩配合錠の使用状況について、第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019年
27. 櫛田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨、ラルテグラビルカリウムの投与法間におけるトラフ血漿中濃度の比較検討、第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019年
28. 矢倉裕輝、中内崇夫、櫛田宏幸、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨、テノホビルアラフェナミド投与時のテノホビル血漿トラフ濃度に関する検討、第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019年
29. 渡邊 大、上平朝子、鍵浦文子、松山亮太、梯 正之、砂川富正、白阪琢磨、当院の新規診断 HIV 感染者における診断時 CD4 陽性 T リンパ球数と血中 HIV-RNA 量の年次推移に関する検討。第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019年
30. 渡邊 大、HIV 感染症の予後と死因 Update。シンポジウム「治療の手引き」。第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019年
31. 渡邊 大、主要中核拠点病院での抗レトロウイルス治療の実際。シンポジウム「治療の手引き」。第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019年
32. 岩橋佑樹、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、榊田智仁、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨、HIV 感染者において市中感染型 MRSA による皮膚軟部組織感染症と菌血症を認めた一例、第227回日本内科学会近畿地方会、京都、2020年
33. Yasuharu Kawamoto, Satoshi Tanaka, Akio Ishihara, Dai Watanabe, Tomoko Uehira, Hisashi Ishida, Takuma Shirasaka, Eiji Mita. Immune reconstitution inflammatory syndrome and CD4 lymphocyte count as predictive factors for HBsAg seroclearance in HBV/HIV patients treated with antiretroviral therapy. European Association for the Study of Liver, The International Liver Congress 2019, Vienna, 2019
34. Hiroki Yagura, Dai Watanabe, Takao Nakauchi, Hiroyuki Kushida, Kosuke Tomishima, Kazuyuki Hirota, Takashi Ueji, Yasuharu Nishida, Takashi Miyabe, Rumi Sako, Kazutaka Yamauchi, Kunio Yamazaki, Tomoko Uehira, Takuma Shirasaka. Discontinuation of long-term dolutegravir treatment is associated with UGT1A1 gene polymorphisms. 10th IAS Conference on HIV Science (IAS 2019), Mexico City, 2019
35. Yujiro Yoshihara, Kenji Kato, Dai Watanabe, Takuma Shirasaka, Toshiya Murai. Differences of cognition and brain white matter between cART-treated HIV-infected patients with low and high CD4 nadir. NEUROSCIENCE 2019, Chicago, 2019
- H. 知的財産権の出願・登録状況
該当なし